

# 身体拘束・行動制限の廃止と 支援の質の向上

社会福祉法人同愛会

東京事業本部

大泉つつじ荘

事業所長 竹矢 恒

# 袖ヶ浦福祉センター虐待事件

2013年11月25日

社会福祉法人千葉県社会福祉法人  
「県立袖ヶ浦福祉センター養育園」  
の利用者（19歳男性）が夕食後、呼吸困難  
となり救急病院搬送後、翌日亡くなる。

その後の調査で①日常的な虐待（職員5名）  
があり、②亡くなった方以外の9名の利用者  
にも虐待を行っていたことが発覚する。

## 2.提言・報告等

千葉県社会福祉事業団による千葉県袖ヶ浦福祉センターにおける  
虐待事件問題、同事業団のあり方及び同センターのあり方について  
（最終報告（答申））  
（平成26年8月7日）

[PDF 答申概要\(PDF:135KB\)](#)

[PDF 答申全文\(PDF:496KB\)](#)

[zip 資料一式\(統合\)\(ZIP:4,557KB\)](#)

[zip 資料一式\(分割\)\(ZIP:4,906KB\)](#)



更新日:平成26(2014)年8月7日 [印刷](#)

### 千葉県社会福祉事業団問題等第三者検証委員会

県では、千葉県社会福祉事業団における<1>虐待事件及びこれまでの虐待事業の発生の経緯、原因、責任の所在、<2>業務管理の実態、<3>今後の組織のあり方等について、調査・検証を行うとともに、千葉県袖ヶ浦福祉センターのあり方について、検証を行うため、千葉県社会福祉事業団問題等第三者検証委員会を設置しました。

#### 1.第三者検証委員会委員

##### (1)委員の選考

権利擁護の専門家や、今回事件のあった養育園等の袖ヶ浦福祉センターの当事者である知的障害等の利用者の保護者、連携・協力が必要な福祉事業者、袖ヶ浦福祉センター利用者の障害特性に精通した専門家など、様々な立場の方を構成員とした。

##### (2)委員名簿(平成26年4月1日現在)

氏名	役職等	職種等
佐藤 彰一 (座長)	千葉県障害者虐待防止連携協議会副会長 弁護士 国学院大学法科大学院教授 千葉県障害者総合支援協議会権利擁護専門部会長	弁護士
村山 園	千葉県手をつなぐ育成会権利擁護委員会委員長	当事者(保護者) [知的障害]
大屋 滋	千葉県自閉症協会会長 旭中央病院脳神経外科部長	当事者(保護者) [発達障害]
早坂 裕美子	千葉県知的障害者福祉協会権利擁護委員会委員長 (福)まっど育成会法人統括施設長	事業者 [知的障害、発達障害]
堀藤 勝美	千葉県社会福祉協議会副会長	事業者 [福祉全般]
志賀 利一	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部長	学識経験者

## 福祉施設の暴行、施設長が上司に虚偽報告

知的障害のある児童らの福祉施設で、入所者の少年(19)が職員の暴行を受けた後に死亡した事件で、同施設の施設長が2年前に起きた職員2人による暴行を把握したが、上司のセンター長に「不適切な支援(対応)はなかった」と虚偽の報告をしていたことが分かった。

県は、同施設の指定管理者の社会福祉法人に対し、障害者総合支援法と児童福祉法に基づき、同園の新規利用者の受け入れを当分の間停止する行政処分と、施設長を施設運営に関与させない体制整備の検討などを求める改善勧告を出した。

県によると、施設長は立ち入り検査時には「暴行の報告はなかった」と説明。しかし、その後の県の調査に「報告があったことを思い出した。聞き取り調査したが虐待はなかった」と証言を覆した。

さらに、県が詳しく事情を聴くと、施設長は「もう1つ報告があったことを思い出した」として、平成23年に職員4人が虐待をしたとの報告があったと証言。このうち2人が暴行したと判断し、口頭注意したことを認めた。その後、施設長はセンター長に「不適切な支援はなかった」と事実と異なる報告をしたが、県は理由について「現時点では施設長に聞いていない」としている。

県はこれまでに、同施設の前職員5人が少年を含む入所者10人を日常的に暴行していたことを確認。別の職員3人も暴行した疑いが判明している。3回目の立ち入り検査では、新たに職員1人の暴行が確認されたほか、同施設や関連の障害者施設の職員計2人が入所者に暴行した疑いも浮上した。

(2013年 産経ニュース)



## 虐待防止・身体拘束廃止の観点から

(参考)

### 千葉県袖ヶ浦福祉センターにおける虐待事例について

【事案の概要】 昨年11月 上記センター(千葉県社会福祉事業団が指定管理者として運営)の強度行動障害を有する利用者が、職員から暴行を受けた後、病院に救急搬送され死亡

(※本年3月11日:当該職員は傷害致死容疑で逮捕)

#### ※ 確認された状況

(平成16年度から平成25年度まで10年間)

##### ○ 身体的虐待(暴行)

職員 11人 被虐待者 17人

##### ○ 性的虐待

職員 2人 被虐待者 2人

##### ○ 心理的虐待

職員 3人 被虐待者 4人

---

合計(実人数) 虐待者 15人 被虐待者 23人

(※この他に、虐待を行った疑義のある者3人)

## 千葉県社会福祉事業団問題等第三者検証委員会最終報告書(26年8月:抜粋)

### 1 人材育成や研修、職場環境、職員配置

#### (1)職員の資質や職場環境の問題

虐待(暴行)の原因の一つには、個人の問題として、支援スキルが不十分であり、また、虐待防止についての基礎的知識がない、ということが挙げられる。このため、支援に行き詰まり、行動障害を抑えるために暴行に至った面があることは否定できない。

例えば養育園第2寮の暴行した5人は、更生園で実施されているような行動障害に係る専門研修や、虐待防止に関する研修をほとんど受けていなかった。

また、支援に行き詰まりかけていた段階で、始めは緊急避難的な過剰防衛としての力を行使していたと考えられるが、だんだんとその方が通常の支援より楽だと思い、通常の適切な支援の実施に努めずに、安易に暴行を行うことを繰り返していた。

さらに、このような支援方法が、何人かの新たに配属された職員に容易に伝達したと考えられる。周りが安易な方法(暴行)を採っているから自分も安易な方法を、と、つまり、周りがやっているから自分がやっても大丈夫だ、と感覚が幼稚化、そして麻痺し、負の連鎖が発生したものと考えられる・・・



## 「障害者福祉施設等における障害者虐待の防止と対応の手引き」改訂(案)のポイント

### 改訂の主旨とポイント

平成25年11月に発生した千葉県袖ヶ浦福祉センターにおける虐待死亡事案等、障害者福祉施設従事者等による深刻な障害者虐待事案が相次いでいること等を踏まえ、「障害者福祉施設等における障害者虐待の防止と対応の手引き」を改訂。そのポイントは以下の通り。

#### (1) 虐待が起きた場合の対応について

- ① 重大かつ深刻な虐待事案を今後の教訓とするために、実際の虐待事案を記述。
- ② 虐待行為が刑事罰に該当する場合があることを記述。
- ③ 通報義務の履行についてさらに強調。
- ④ 法に基づく事実確認調査に対する虚偽答弁の罰則規定等を記述。

#### (2) 虐待防止のための体制整備の強化について

- ① 虐待防止の組織的取り組みを促すため、虐待防止委員会、虐待防止マネージャーについてより具体的に記述。
- ② 職場内研修用の冊子を掲載。
- ③ 職員のストレスの把握とメンタルヘルスについて記述。
- ④ やむを得ず身体拘束を行う場合の記録の義務づけについて省令を記述。
- ⑤ 強度行動障害支援者養成研修について記述

# この時間で学ぶこと

- 身体拘束を廃止すべき理由
- 身体拘束の3要件
- 座位保持装置等に付属するベルト・テーブルの使用
- 強度行動障害の正しい理解
- 強度行動障害の状態にある方が虐待に合いやすい事実の確認
- 強度行動障害の状態にある方への適切な支援
- 強度行動障害支援者養成研修の概要

# 身体拘束について

- 身体拘束を廃止すべき理由
- 身体拘束の3要件
- 座位保持装置等に付属するベルト・テーブルの使用



# 前提として障害者虐待防止法

「正当な理由なく障害者の身体を拘束すること」は身体的虐待に該当する行為とされています。

まずは、「身体拘束」は「虐待」であるという認識が必要です。

当然、**身体拘束は廃止されるべき事**です。

# どんな内容が身体拘束に該当するのか？

- ① 車いすやベッド等に縛り付ける。
- ② 手指の機能を制限するために、ミトン型の手袋を付ける。
- ③ 行動を制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる。
- ④ 支援者が自分の体で利用者を押さえ付けて行動を制限する。
- ⑤ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。
- ⑥ 自分の意思で開けることのできない居室等に隔離する。

# “やむを得ず”

注意が必要なワンフレーズ  
「やむを得ない場合を除き」

やむを得なければ身体拘束をしても許されるのでしょうか？

ここがポイントです！



# 「やむを得ない」 ですか？

- **人手不足で利用者の安全が確保できません。**

→人手不足は利用者の責任？ 十分なリスクマネジメントが為されていますか？ 業務の采配、マネジメントは十分ですか？ 組織のルールは見えるようになってますか？

- **支援力不足（ケアの質）で事故の可能性が...**

→職員の質が低いのは利用者の責任？ 支援の質を上げる努力は十分でしょうか？ 組織的に人材の確保に努めていますか？

# 正当な理由？

虐待防止法では

「**正当な理由なく**」 障害者の身体を拘束する事は、「虐待」

ちょっと待て。正当な理由って何だ？

→**誰にとって正当な理由**なのか？

## “やむを得ず”身体拘束を行う時の留意点

緊急やむを得ない場合を除き身体拘束等を行ってはならないと記載されています。

「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」

では「緊急やむを得ない」時とは？

やむを得ず身体拘束を行う場合の3要件



# 「緊急やむを得ない」時の視点

## ①切迫性

利用者本人又は他の利用者等の生命、身体、権利が危険にさらされる可能性が著しく高いことが要件となります。切迫性を判断する場合には、身体拘束を行うことにより本人の日常生活等に与える悪影響を勘案しそれでもなお身体拘束を行うことが必要な程度まで利用者本人等の生命又は身体が危険にさらされる可能性が高いことを確認する必要があります。

## 「緊急やむを得ない」時の視点

### ②非代替性

身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないことが要件となります。非代替性を判断する場合には、まず身体拘束を行わずに支援する全ての方法の可能性を検討し、利用者本人等の生命又は身体を保護するという観点から、他に代替手法が存在しないことを複数職員で確認する必要があります。また、拘束の方法についても、利用者本人の状態像等に応じて最も制限の少ない方法を選択する必要があります。

「緊急やむを得ない」時の視点

### ③一時性

身体拘束その他の行動制限が一時的であることが要件となります。一時性を判断する場合 には、本人の状態像等に応じて必要とされる最も短い拘束時間を想定する必要があります。



# その上で厳格な手続きが必要

やむを得ず身体拘束を行う場合の3要件を満たしても、更に**厳格な手続き**が必要

身体拘束を決して安易に行わず、慎重に判断することが求められています。

- ◆組織による決定
- ◆個別支援計画への記載
- ◆本人・家族への十分な説明
- ◆必要な事項の記録

# 組織による決定

やむを得ず身体拘束を行うときには、個別支援会議等において**組織として慎重に検討・決定する必要があります**。この場合、管理者、サービス管理責任者、運営規程に基づいて選定されている虐待の防止に関する責任者等、支援方針について権限を持つ職員が出席していることが大切となります。

# 個別支援計画への記載

身体拘束を行う場合には、**個別支援計画に身体拘束の様態及び時間、緊急やむを得ない理由を記載**します。これは、会議によって身体拘束の原因となる状況の分析を徹底的に行い、身体拘束の解消に向けた取組方針や目標とする解消の時期等を統一した方針の下で決定していくために行うものとなります。ここでも、利用者個々人のニーズに応じた個別の支援を検討することが重要となります。

# 本人・家族への十分な説明

身体拘束を行う場合には、これらの手続きの中で、適宜利用者本人や家族に十分に説明をし、了解を得ることが必要となります。

# 必要な事項の記録

必要な事項の記録 また、身体拘束を行った場合には、その様態及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由等必要な事項を記録します。なお、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」では、身体拘束廃止未実施減算が定められているため、必要な記録がされていない場合は、運営基準違反に問われる場合があります。

# 身体拘束等の適正化（平成30年度から）

○身体拘束等の適正化を図るため、身体拘束等に係る記録をしていない場合について、基本報酬を減算する。

## 《身体拘束廃止未実施減算【新設】》 5単位／日

※療養介護、生活介護、短期入所、施設入所支援、自立訓練、就労移行支援、就労継続支援、共同生活援助、児童発達支援、医療型児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援、居宅訪問型児童発達支援、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設等

○障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準  
(身体拘束等の禁止)

第四十八条 指定障害者支援施設等は、施設障害福祉サービスの提供に当たっては、利用者又は他の利用者の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束その他利用者の行動を制限する行為(以下「身体拘束等」という。)を行ってはならない。

2 指定障害者支援施設等は、やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならない。

### (1) やむを得ず身体拘束を行う場合の3要件

- ①切迫性：利用者本人又は他の利用者等の生命、身体、権利が危険にさらされる可能性が著しく高いこと
- ②非代替性：身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないこと
- ③一時性：身体拘束その他の行動制限が一時的であること

### (2) やむを得ず身体拘束を行うときの手続き

- ① 組織による決定と個別支援計画への記載
- ② 本人・家族への十分な説明
- ③ 必要な事項の記録



## （身体拘束廃止未実施減算の取扱い）

### 問 1 身体拘束廃止未実施減算について、適用にあたっての考え方如何。

（答）

身体拘束の取扱いについては、以下の参考において、示されているところであるが、やむを得ず身体拘束を行う場合における当該減算の適用の可否にあたっては、これらの取扱いを十分に踏まえつつ、特に以下の点に留意して判断いただきたい。

- 利用者に係る座位保持装置等に付属するベルトやテーブルは、脊椎の側わんや、四肢、関節等の変形・拘縮等の進行あるいは防止のため、医師の意見書又は診断書により製作し、使用していることに留意する。
- その上で、身体拘束に該当する行為について、目的に応じて適時適切に判断し、利用者の状態・状況に沿った取扱いがなされているか。
- その手続きについては障害福祉サービス等の事業所・施設における組織による決定と個別支援計画への記載が求められるが、記載の内容については、身体拘束の様態及び時間、やむを得ない理由を記載し、関係者間で共有しているか。
- なお、ケア記録等への記載については、必ずしも身体拘束を行う間の常時の記録を求めているわけではなく、個別支援計画には記載がない緊急やむを得ず身体拘束を行った場合には、その状況や対応に関する記載が重要である。
- 行動障害等に起因する、夜間等他利用者への居室への侵入を防止するために行う当該利用者居室の施錠や自傷行為による怪我の予防、保清を目的とした不潔行為防止のための身体拘束については頻繁に状態、様態の確認が行われている点に留意願いたい。
- これらの手続きや対応について、利用者や家族に十分に説明し、了解を得ているか。等
- なお、身体拘束の要件に該当しなくなった場合においては、速やかに解除することについても留意願いたい。

以上を踏まえ、最終的には利用者・家族の個別具体的な状況や事情に鑑み、判断されたい。

## 身体拘束等の適正化の推進

- 身体拘束等の適正化の更なる推進のため、**運営基準において施設・事業所が取り組むべき事項を追加**するとともに、**減算要件の追加**を行う。  
※療養介護、生活介護、短期入所、施設入所支援、自立訓練、就労移行支援、就労継続支援、共同生活援助、児童発達支援、医療型児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援、居宅訪問型児童発達支援、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設
- **訪問系サービスについても**、知的障害者や精神障害者も対象としており、身体拘束が行われることも想定されるため、運営基準に「身体拘束等の禁止」の規定を設けるとともに、**「身体拘束廃止未実施減算」を創設**する。  
※居宅介護、重度訪問介護、同行援護、行動援護、重度障害者等包括支援

### 運営基準

以下、②から④の規定を追加する（訪問系以外のサービスについては、①は既に規定済）。訪問系サービスについては、①から④を追加する。

②から④の規定は、令和3年4月から努力義務化し、令和4年4月から義務化する。なお、訪問系サービスにおいて追加する①については、令和3年4月から義務化する。

- ① 身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録すること。
- ② 身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会を定期的を開催するとともに、その結果について、従業者に周知徹底を図ること。
- ③ 身体拘束等の適正化のための指針を整備すること。
- ④ 従業者に対し、身体拘束等の適正化のための研修を定期的を実施すること。

※ 虐待防止の取組で身体拘束等の適正化について取り扱う場合には、身体拘束等の適正化に取り組んでいるものとみなす。

### 減算の取扱い

運営基準の①から④を満たしていない場合に、基本報酬を減算する。（身体拘束廃止未実施減算5単位／日）

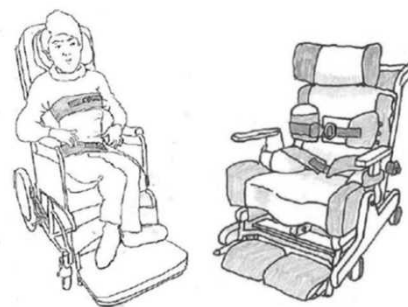
ただし、②から④については、令和5年4月から適用する。

なお、訪問系サービスについては、①から④の全てを令和5年4月からの適用とする。

# 座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

## 座位保持・座位保持装置の視点

①車椅子等に座った時に、姿勢をしっかりと保持（維持）するここで、背もたれ、座面等の機能がその人に合うように調整される必要があります

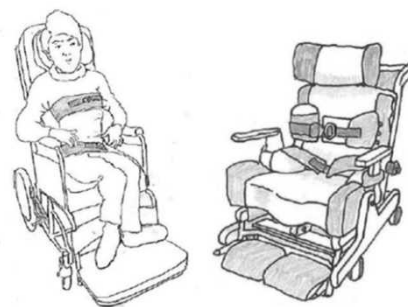


(座位保持装置等の例)

# 座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

## 座位保持・座位保持装置の視点

②褥瘡予防（座圧）、移動保障の視点等  
も踏まえ、アセスメントを経て、その人  
のQOLを高める上で車いすユーザーには  
不可欠な機能と言えます



(座位保持装置等の例)

# 座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

## 座位保持・座位保持装置の視点

③身体に重度の障害のある人の中には、  
脊椎の側わんや、四肢、関節等の変形・  
拘縮等の進行により、身体の状態に合わ  
せ体幹の安定等のため座位保持装置や車  
いすを医師の意見書又は診断書により  
オーダーメイド等により製作し、使用さ  
れている方も少なくありません。そのた  
め安全かつ安楽に座位が維持されるよう  
にベルトやテーブルも使用されます

# 一概に身体拘束にあらず

ベルトやテーブルを身体拘束にあたるとして、ベルトを外し転落したり、怖い思いをされるということが各所で起きています。そのため危険を回避しようとして、ベッド上での生活を強いるなど不適切な対応を招くこともあります。むしろベルトやテーブルを外すことで危険を招く場合があります



# 身体拘束との違い

座位の安定、移動の自由、快適な暮らしを維持するために、ご本人（場合によってはご家族）の意思で、適正な手続きを踏み、適宜見直されていれば、「身体拘束」同様の詳細な記録は求められていません。その目的や対応に応じて適切に判断される必要があります

# 記録は？

平成31年3月29日付け厚生労働省障害福祉部障害福祉課事務連絡では「ケア記録等への記載については、必ずしも身体拘束を行う間の常時の記録を求めているわけではなく、個別支援計画に記載がない緊急やむをえず身体拘束を行った場合には、その状況や対応に関する記載が重要である」（障害福祉サービス等報酬に係るQ&A）と明記されました

ただし！  
座位保持装置でも留意点は守る必要があります

ベルトやテーブルをしたまま障害者を椅子の上で長時間放置するような行為については身体拘束に該当する場合もあるため、座位保持装置等に付属するベルトやテーブルの使用であれば一律に身体拘束ではないと判断することも適当でないのは当然のことですので留意が必要です。

ただし！  
座位保持装置でも留意点は守る必要があります

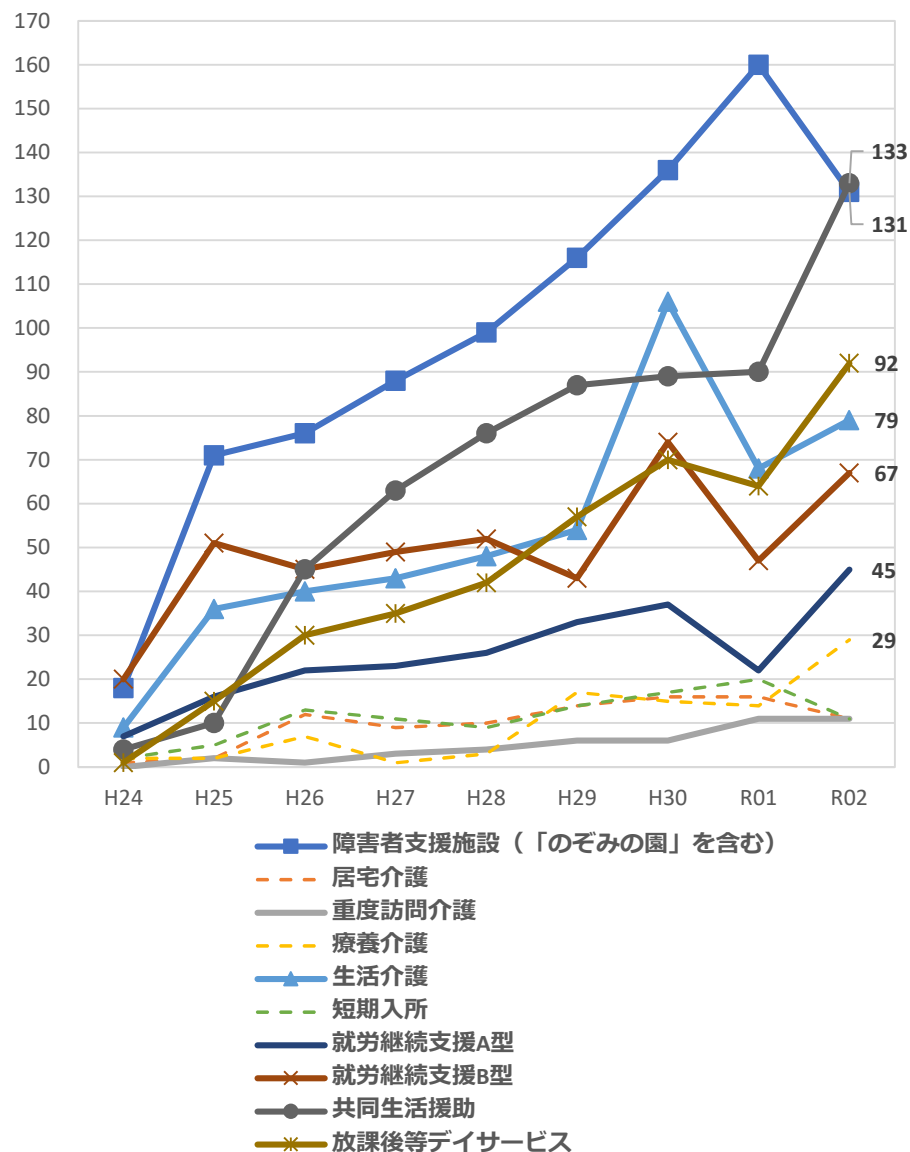
座位保持装置等を漫然と長時間使用することを防ぐためには、個別支援計画に座位保持装置等を使用する場面や目的、時間とともに、リクライニングによる体位変換やベッドや他の用具等に移乗して休息する時間についても記載し、長時間の同一姿勢による二次障害や褥瘡を計画的に防止することが必要です。

# 強度行動障害の状態にある方の支援について

- 強度行動障害の状態にある方が虐待に合いやすい事実の確認
- 強度行動障害の正しい理解
- 強度行動障害の状態にある方への適切な支援
- 強度行動障害支援者養成研修の概要

# 障害者虐待対応状況調査

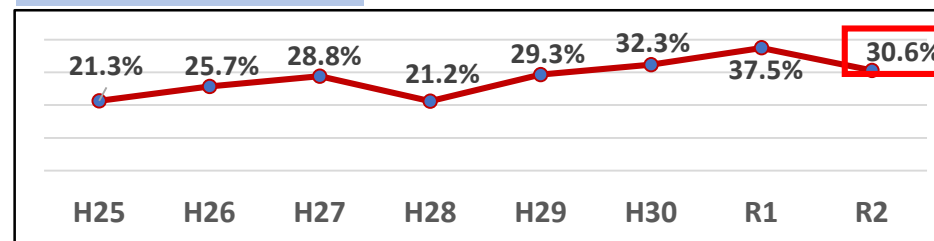
## <障害者福祉施設従事者等による障害者虐待>（抜粋）



### 被虐待者の割合

	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	難病等
H25	29.2%	79.8%	14.1%	6.4%	1.8%
H26	21.9%	75.6%	13.5%	2.3%	0.0%
H27	16.7%	83.3%	8.8%	2.3%	0.0%
H28	14.4%	68.6%	11.8%	3.6%	0.7%
H29	22.2%	71.0%	16.7%	5.1%	2.7%
H30	22.7%	74.8%	13.5%	4.2%	0.5%
R1	21.3%	78.7%	11.7%	3.7%	1.2%
R2	18.2%	71.6%	19.4%	5.7%	0.8%

### 行動障害のある者の割合



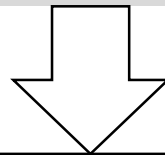
### 発生要因の割合

市区町村等職員が判断した虐待の発生要因	H28	H29	H30	R1	R2
教育・知識・介護技術等に関する問題	65.1%	59.7%	73.1%	59.8%	71.0%
職員のストレスや感情コントロールの問題	52.2%	47.2%	57.0%	55.3%	56.8%
倫理観や理念の欠如	53.0%	53.5%	52.8%	53.6%	56.1%
虐待を助長する組織風土や職員間の関係性の悪さ	22.0%	19.1%	22.6%	16.2%	22.6%
人員不足や人員配置の問題及び関連する多忙さ	22.0%	19.6%	20.4%	24.2%	24.2%



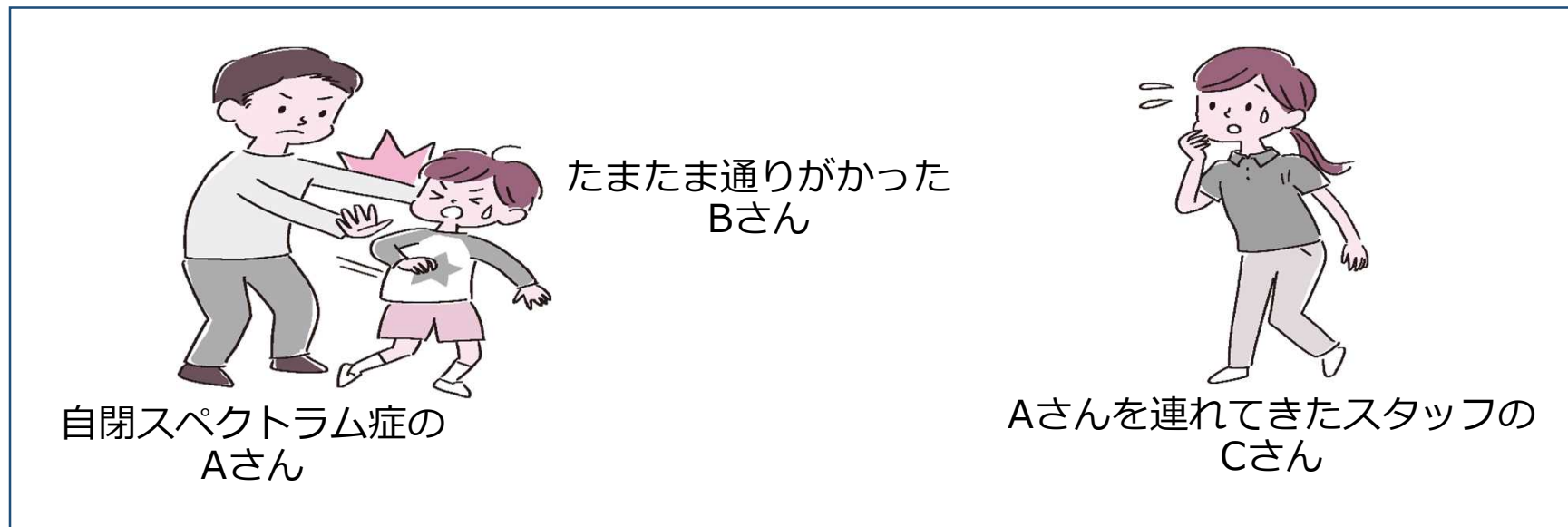
# 強度行動障害とは？

自傷、他傷、こだわり、もの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語



- × もともとの障害
- その人の状態のこと

- ・あるショッピングモールでの出来事です。
- ・放課後等デイサービスの活動の一環で、数人の子どもたちと一緒に買い物体験に来ていたAさん。
- ・あるショッピングモールで、たまたま通りかかったBさんを押してしまいました。
- ・困っているのは誰でしょう？



一般的には、「わけのわからないまま押されてしまったBさん」  
「Aさんを連れてきたCさん」

と答える人が多いかもしれません。

実は、Aさんも困っています。

なぜなら、ショッピングモールのようなうるさい環境が苦手なほか、  
そういった環境にいつまでいなければいけないのか分からないからです。

「うるさくていやだよ～」

「いつまでここにいなければいけないの？」

「はやく帰りたいよ～」

障害により、こういった気持ちを言葉で  
上手に伝えることができない

その困り具合を・・・

“目の前に通った子を押す”という行動で表現



だから答えは、「みんな」です

ということを、この研修の受講者には理解して欲しいのです。

Aさんのように、障害からくる苦手さを持つ人たちは、困っています。

### 障害からくる苦手さ

先の予測をすることが難しい

見えないものの理解が難しい

話し言葉の理解が難しい

抽象的であいまいな表現の理解が難しい

話し言葉で伝えることが難しい

やりとりの量が多いと処理が難しい

少しの違いで大きな不安を感じる

聴覚の過敏や鈍麻がある

⋮



不安

緊張



不安や緊張から

逃れたい

不安や緊張を

伝えたい

不安や緊張に

気づいてほしい

でも方法がわからない



気持ちを **行動** で表す



- そのまま、障害からくる苦手さが解消されないと、さらに、激しい行動をとることがあります。



- また、適切な行動を教えてもらう機会がなかったり
- 自分の気持ちを伝えるために激しい行動を取った時、周囲がその行動を止めるために本人が望むままの対応を繰り返していると、「激しい行動をすることで自分の気持ちが伝わる」と理解し、激しい行動が定着してしまうこともあります。

このように、

- ☑ 適切な行動を教えられていない
- ☑ 周囲が誤った対応を繰り返す



行動が激しくなっていく

**= 「強度行動障害の状態」**

といいます。

## ▶適切な支援がない場合

Aさんの事例で考えてみましょう



知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

「うるさいのが苦手」「いつまでいるのかわからない」

苦手な環境が続く（言葉で上手く伝えられない）。



（自分の気持ちを表すために）近くを通った子を押す。



ショッピングモール 立ち入りを断られる

買い物ができない

**生活の範囲が狭まる**

事業所から利用を断られることも……。そして、より行き場のない生活へ



## ▶適切な支援がある場合

知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

本人の特性に合わせ、騒がしくない時間帯にお店に行く  
いつまでお店にいるか本人にわかるように伝える。

**「合理的配慮」** といいます

「分かる」 「快適」

「充実」 「安心」



・外出を楽しむ ・違うお店でも買い物ができる

**社会参加が進む**

**地域の中で安心して幸せな生活ができる**



強度行動障害の状態になっている人は、  
「**困った人（子）**」ではなく「**困っている人（子）**」  
= 合理的配慮が必要な人

私たち支援者は、  
私たちの理解や配慮によって

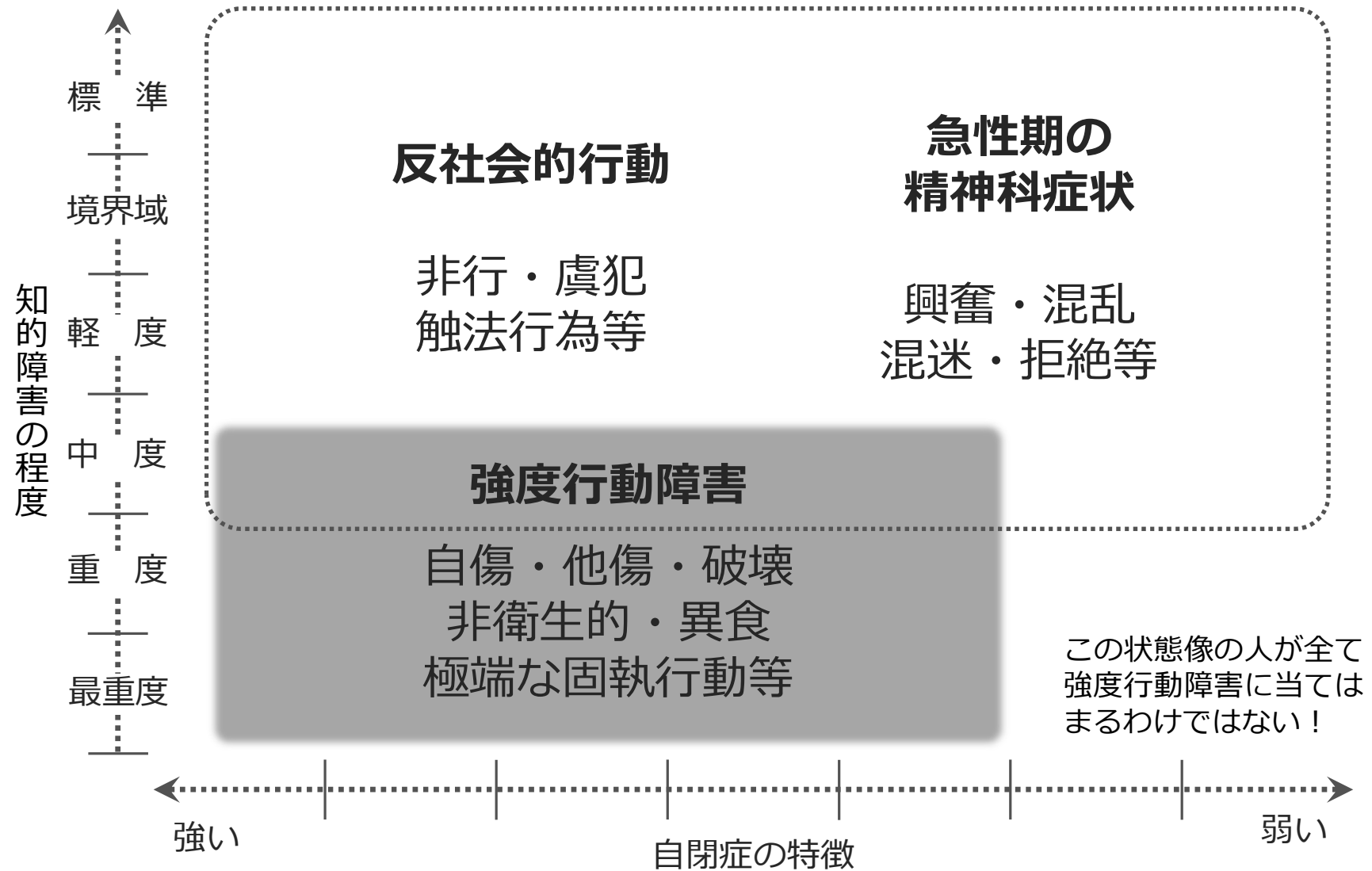
- ☒ 強度行動障害の状態にならないよう**予防**することができる
- ☒ 既に現れている強度行動障害を**軽減**できる

そして

- ☒ 彼らの**社会参加**を進めることができる

ということを認識することが大切

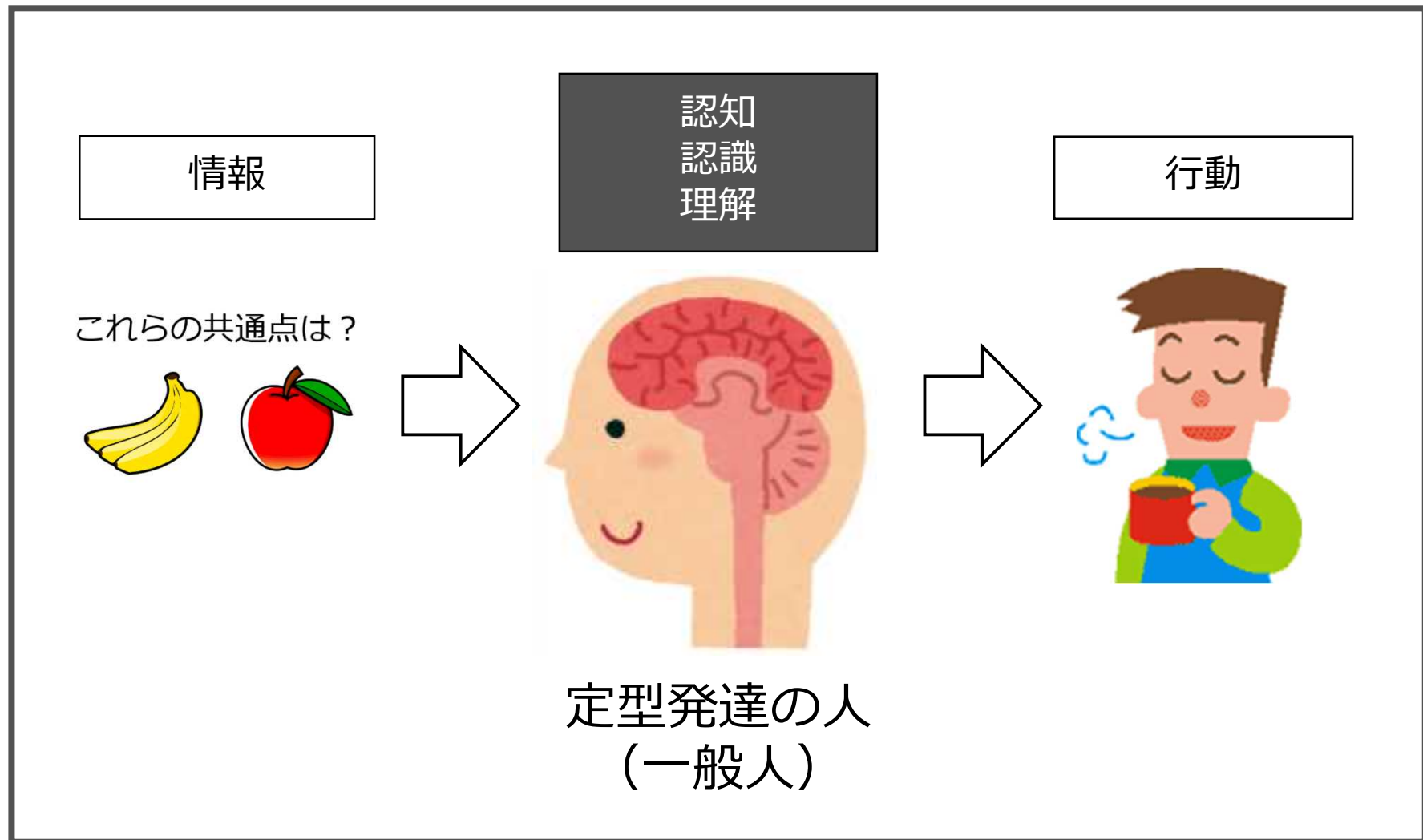
# 強度行動障害になりやすいのは



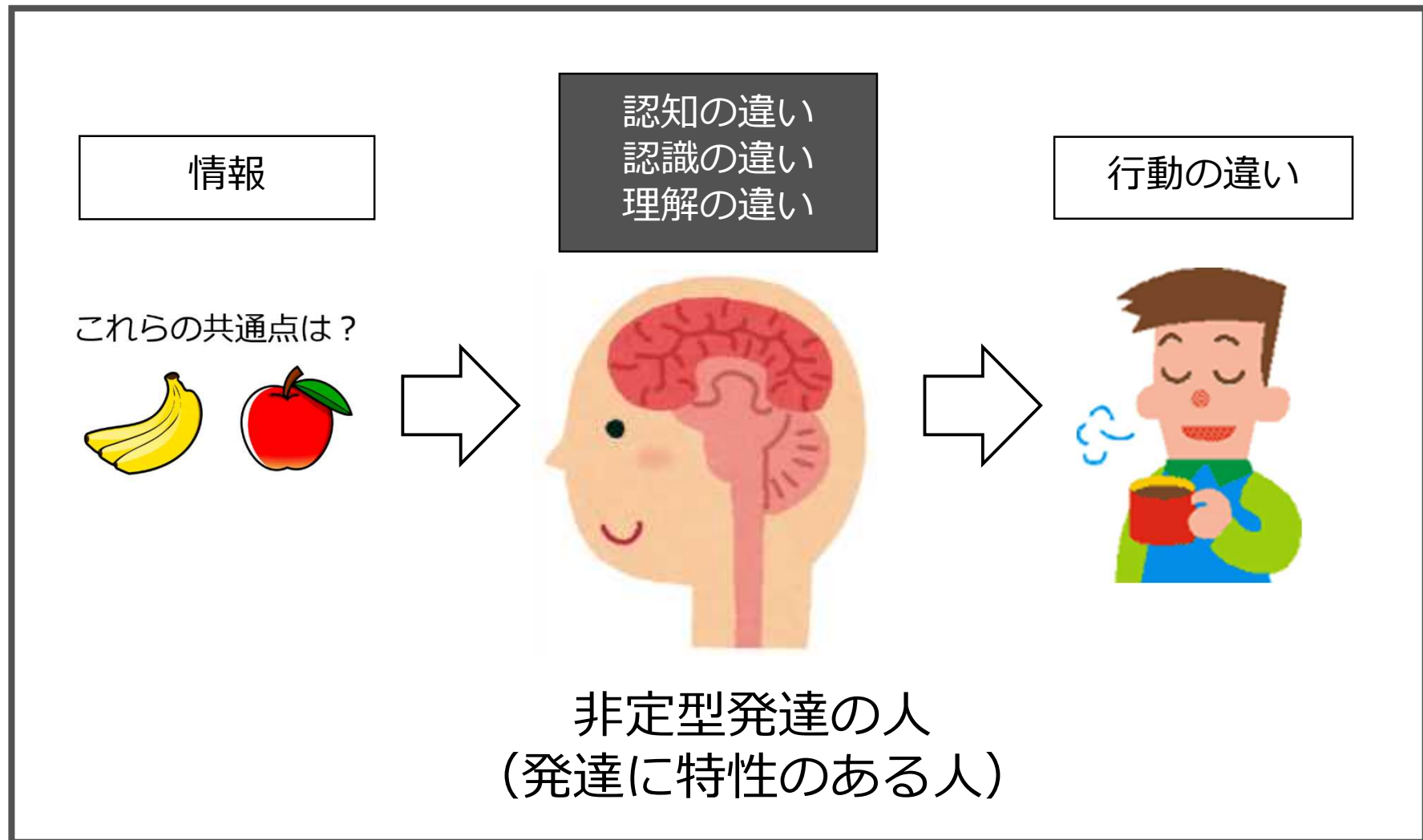
# 自閉症について

- 現在、自閉症のことを正式には「自閉スペクトラム症」もしくは「自閉症スペクトラム障害」と呼びます。いろいろなタイプがいて、境目のない連続体として広がっているという考え方です。
- 自閉症は、社会性やコミュニケーションの困難、想像力（目の前にないことをイメージすること）の困難が診断基準となり、感覚の特異性も診断の際に考慮されます。

# 人は情報を脳で処理をして行動をしている



# 自閉症は脳の機能的な障害



# 強度行動障害の適切な支援

障害特性への合理的配慮の視点

それぞれの障害特性を理解し、得意な部分は生活に活用し、苦手な部分へ寄り添うことが大切。

まずは特性の理解！

# なぜ、自閉症の特性を整理するのか

自閉症の人たちは社会では少数派です。

その物事のとらえ方は、多くの人たちとは異なります。

自閉症の人たちがどのような物事のとらえ方をしているのかは、特性を把握し整理することで見えてきます。

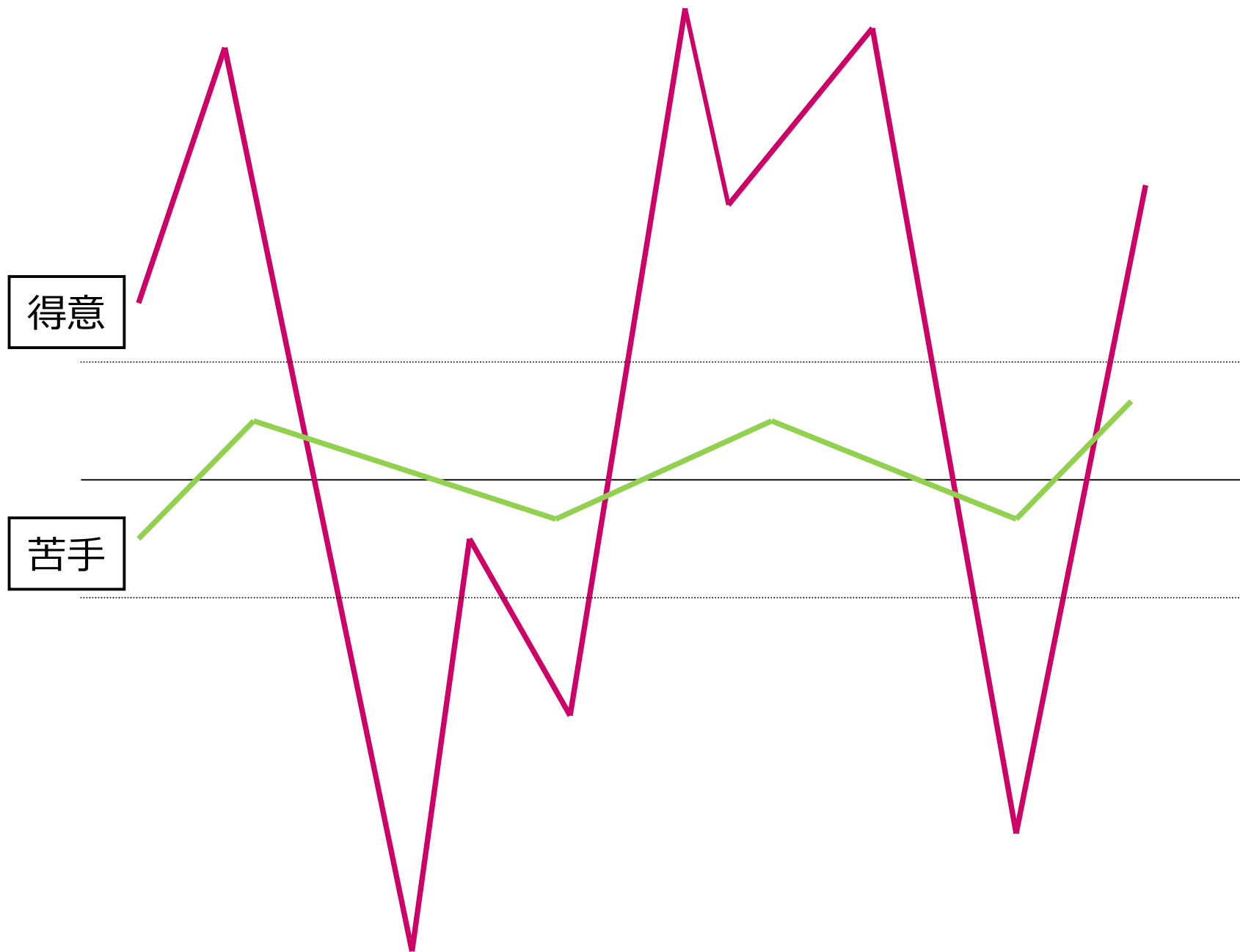


# 特性とは

「強み」と「弱み」と言い換えることもできます。

「強み」は支援に生かすもので、  
「弱み」は支援者が配慮するところ と言えます。

それゆえ、特性の把握においては、  
「強み」と「弱み」の両面を整理しておくことが重要  
です。



- 自閉症の人たちの

物事のとらえ方に合わせた支援をすることで、  
自閉症の人たちは適切に学ぶことができ、  
強度行動障害という状況に陥ることなく、  
よりよい生活を送ることができます。

- 私たちは、自閉症の人たちの特性を常に学び、  
支援の基盤に置く必要があるのです。

ここでは、自閉症の特性を次のように整理しています。

- 社会性の特性
- コミュニケーションの特性
- 想像力の特性
- 感覚の特性

# 視点① 社会性の特性

## 【人や集団との関わりに難しさがある】

- ・相手への関心が薄い
- ・相手から期待されていることを理解することが難しい
- ・相手が見ているものを見て、相手の考えを察することが難しい

## 【状況の理解が難しい】

- ・周囲で起こっていることへの関心が薄い
- ・周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい
- ・見えないものの理解が難しい

☆自分がすべきことが明確であれば、集団への適応が増す。

## 視点② コミュニケーションの特性

### 【理解が難しい】

- ・ 話し言葉の理解が難しい
- ・ 一度にたくさんのことを理解するのが難しい
- ・ 抽象的であいまいな表現の理解が難しい

### 【発信が難しい】

- ・ 話し言葉で伝えることが難しい
- ・ どのようにして伝えたらいいか分からない
- ・ 誰に伝えていいか分からない

## 視点② コミュニケーションの特性

### 【やりとりが難しい】

- ・ 場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい
- ・ 表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい
- ・ やりとりの量が多いと処理が難しい

☆話し言葉だけではない、たとえば目に見えるツールを活用することで、伝達度が増す。

## 視点③ 想像力の特徴

※想像力：目の前にないことをイメージする力

### 【自分で予定を立てることが難しい】

- ・ 段取りを適切に組むことが難しい
- ・ なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
- ・ 今やることを自分で判断することが難しい

### 【変化への対応が難しい】

- ・ 先の予測をすることが難しい
- ・ 臨機応変に判断することが難しい
- ・ 自分のやり方から抜け出すことが難しい



## 視点③ 想像力の特徴

### 【物の一部に対する強い興味】

- ・ 興味・関心が狭くて強い
- ・ 細部が気になり違いに敏感
- ・ 少しの違いで大きな不安を感じる

☆目の前に存在する視覚情報があるとわかりやすさが増す。

☆自分が興味・関心のある対象への思いが強みになることも多い。

## 視点④ 感覚の特性

### 【感覚が過敏または鈍感】

- ・聴覚の過敏や鈍麻がある
- ・視覚の過敏や鈍麻がある
- ・触覚の過敏や鈍麻がある
- ・嗅覚の過敏や鈍麻がある
- ・味覚の過敏や鈍麻がある
- ・前庭覚の特有の感覚がある

☆感覚に関する反応が、心身の状況や調子のバロメーター  
となることも多い。

- 目で見てわかる支援をするのはなぜか？
  - 自閉症の人は目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えたりすることに苦手さがあるから
  - 複数の情報を処理することに苦手さがあるから
  - 雑多な環境の中から必要な情報に目を向けることに苦手さがあるから

# 自閉症支援の基本は目で見てわかる支援

- 目で見てわかる支援をするために
  - わかりにくい情報や生きにくい環境で暮らしている人たち。一人一人にわかりやすい形で届けたり整理したりする必要がある
    - = その人に合わせた支援
    - = 合理的配慮

# 確実に伝えたい6つの情報

- 「いつ」
- 「どこで」
- 「何を」
- 「どのくらい」
- 「どうやって」
- 「次は」

# 6つの情報を確実に伝えるための 5つの工夫

- 時間の工夫（生活の見通し）
- 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）
- 方法の工夫（やり方・終わり・次）
- 見え方の工夫（ヒント・着目）
- やりとりの工夫  
（コミュニケーションツール）

# 時間の工夫（生活の見通し）

- どんな流れで生活するのかという理解を助ける。
- 言われるがまま（または好き放題）ではなく、自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする。

# 場所の工夫

## (活動との対応・刺激の整理)

- この場所では何をするのかという理解を助ける。
  - 整理整頓は基本中の基本
  - エリア（境界）を明確に
  - 場所と活動とが 1 対 1 対応できれば理想だが…
- 苦手な刺激を少なくするための配慮をする



# 方法の工夫（やり方・終わり・次）

- 「何を」「どのくらい」「どうやって」「次は」という理解を助けるために

ーやることの内容や数や順序が違ってても進め方は同じという“システム”を提示する。

# 見え方の工夫（ヒント・着目）

- 見てすぐにわかる情報を提示するために
  - － 必要な情報に注目しやすくする工夫
  - － 見るだけで何をすれば良いかがわかる工夫
  - － 情報や材料が見やすい・扱いやすい工夫

# やりとりの工夫 (コミュニケーションツール)

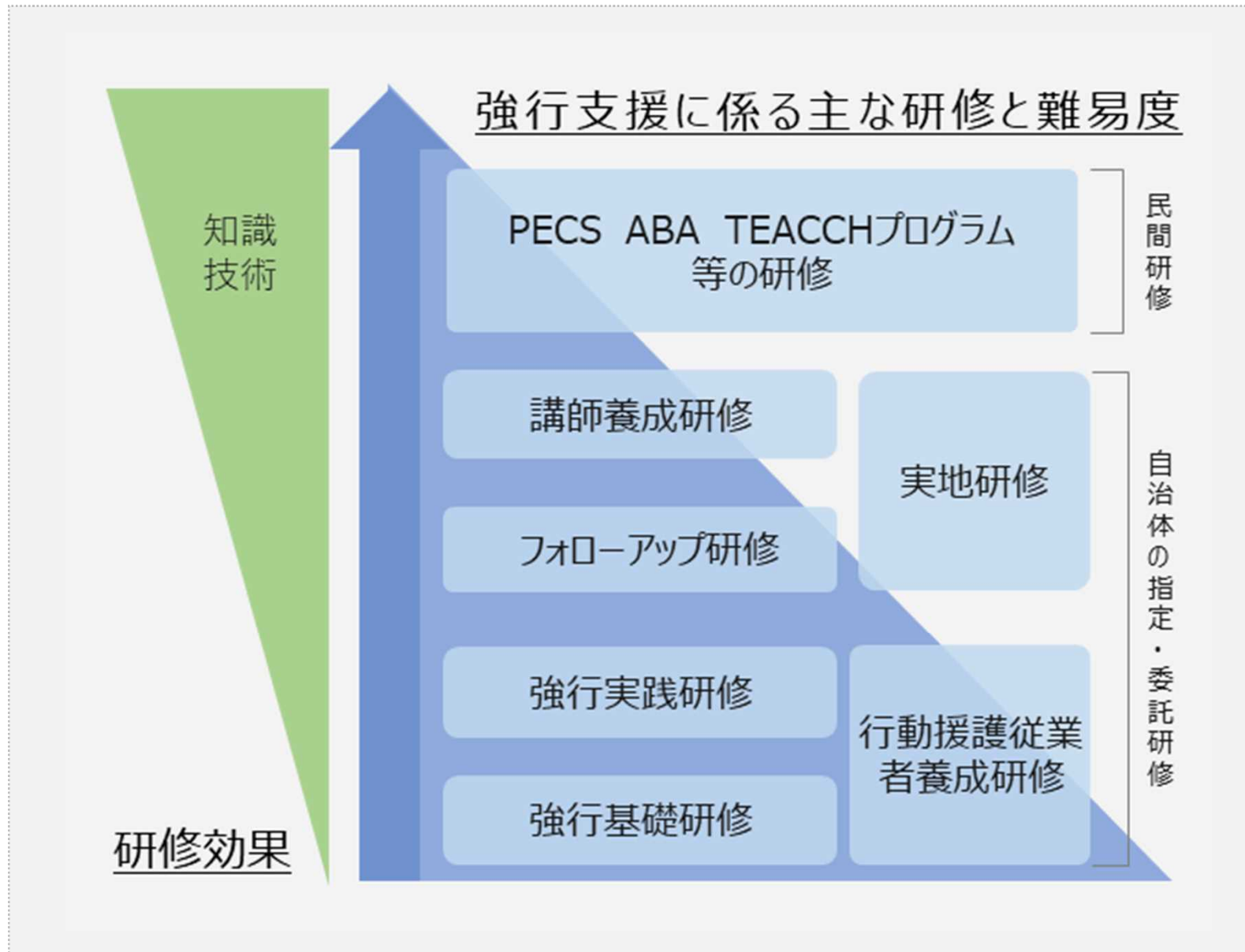
- 伝え合いわかり合うコミュニケーションのために

- ー コミュニケーションの手続きを視覚的に示し、コミュニケーションの成功体験をサポート

# 強度行動障害支援者養成研修について

ストーリー	基礎研修	実践研修
Step 1	強度行動障害について基本的なことを知る	支援を組み立てるための基本的な流れの確認
Step 2	アセスメントに基づいた（情報を収集し、解決すべき課題を整理した上での）個別支援の大切さを理解する	アセスメントの具体的な方法を学ぶ
Step 3	支援の具体的な方法を知る	支援手順書の作成方法を学ぶ
Step 4	チームプレイの重要性を理解する	記録の方法と支援手順書の修正方法を学ぶ
Step 5	適切な支援を続けていくための知識を得る	組織として取り組むことの重要性を学ぶ
到達点	計画された支援の根拠を理解し、決められた手順通りに支援をすることができる。	チームの動きをイメージし、支援の手順を考え文章化する。 また、支援結果に合わせ、支援及び手順の修正をすることができる。

# 強度行動障害が現れている人への支援スキル 修得のためのステップで見る本研修の位置づけ



# 強度行動障害支援の現場



＊ 日常的に続く、物損，パニック，他傷，自傷，こだわり行動，行動停止等の問題。つまづきの要因が分からない，改善しない状況⇒当事者状態の悪化，支援職の疲弊感。

＊ 成人施設の女性職員の在勤率の高さ  
⇒新卒，非常勤女性職員が成人男性のパニックや他傷行為に会い、リスクが予測されるケースは少ない男性職員の対応交代など、一時的な処置で日々をしのいでいる。

# 現場のリアルを知る

リアルな“現場”に寄り添う重要性

「虐待はいけません」だけで虐待が減らない理由…。そんなに甘くない。

リアルな現場を知ってますか？

現場だけに任せるのではなく、施設全体で取り組むことが大切。

# 最後に

## 強度行動障害の支援とは？

×暴れている人が静かになる

○そもそも強度行動障害の状態に陥ることなく豊かな人生を送る